

幼児教育から小学校教育への  
接続カリキュラム

# 学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム

---

— 学びに向かう力を発揮する —

福井県幼児教育支援センター

はじめに	1
<b>第1章 カリキュラムの考え方</b>	
1 幼稚園教育要領等の改訂（改定）のポイント	2
2 幼児教育から小学校教育への接続カリキュラム改訂のポイント	3
<b>第2章 カリキュラムの使い方</b>	
1 幼児教育の先生方へ	5
2 小学校教育の先生方へ	6
3 接続をコーディネートする先生方へ	8
4 すべての先生方へ	9
<b>第3章 【10の姿が育つプロセス】</b>	
1 【10の姿が育つプロセス】の考え方	10
2 【10の姿が育つプロセス】	12
<b>第4章 【遊びのプロセス】</b>	
1 【遊びのプロセス】の考え方	13
2 子どもの育ちを「遊び」からとらえる【遊びのプロセス】	
(1) 運動遊び編	15
(2) なりきる編	16
(3) 不思議編	17
(4) つくろう編	18
(5) 言葉遊び編	19
3 行事から捉える子どもの育ち	
(1) 遠足	20
(2) 運動会	21
(3) 生活発表会	22
4 遊びのプロセスを踏まえた保育者・教師の支援例	23
<b>第5章 接続に向けた取組</b>	
「連携」と「接続」－網の目のようにつなぐ－	35
1 子どもをめぐる情報の伝え合い	38
2 子ども同士の交流	39
3 保育者・教師による相互理解	42
4 環境や学びのつながりの工夫	43
5 教育課程の構築	44
【接続推進計画】	49
<b>参考資料</b>	
～遊びの中の学び～	
1 遊びの中で学ぶ子どもの姿	50
2 事例	59
3 遊びの中の学びを捉え直すために	76
福井大学連合教職大学院 准教授 岸野 麻衣	
(1) 事例を書くことの意味と方法	76
(2) 事例を書く視点：遊びの中の学びのサイクル	78
(3) 事例を持ち寄る：ファシリテーターの役割	80
～幼稚園教育要領解説・小学校学習指導要領関連項目～	82
おわりに	107
参考文献	108

## はじめに

福井県では、「福井型18年教育」のスタート期充実のため、平成24年11月に福井県幼児教育支援センターを開設しました。幼稚園・保育所・認定こども園の横がつながり、幼児教育と小学校教育の縦がつながる中で、長い目で見て子どもの育ちを実現するため、平成27年3月、福井県保幼小接続カリキュラム「学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム -学びに向かう力をはぐくむ-」を策定しました。

このカリキュラム（※）は、5歳児と小学校1年生の2年間に焦点をあて、「学びに向かう力」を核とした、ねらいと道筋を明確化した福井県独自のものです。特徴として、「学びに向かう力」の育成に重点を置き、接続を意識して「5歳児が遊びで経験する内容」を明確化したことが挙げられます。また、接続の仕掛けとして、県内すべての小学校区ごとに、「連携推進カリキュラム」の作成を依頼し、お互いに顔を見てカリキュラムを作成する機会をもつていただいています。この取組開始から3年経ち、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校がお互いの教育について理解しようと、子どもたちの交流活動をはじめ、小学校教諭による保育参観、幼稚園教諭・保育士・保育教諭（以下、「保育者」という。）による授業参観が徐々に広がっています。

5歳児と小学校1年生の接続を図ることに 대해서는、土台ができあがりつつあり、カリキュラムの大きな役割は果たされつつあると考えられます。

平成29年3月に告示された、幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領（以下「幼稚園教育要領等」という。）の改訂（改定）により、3歳以上の「ねらい及び内容」をはじめ、幼児教育に関する記載がおおむね共通化されると共に、「幼児期において育みたい資質・能力」および「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたことを受け、これまでの県の考え方を踏襲しつつ、カリキュラムを見直す必要が出てきました。

福井県として、「従来のカリキュラムをより長い育ちのつながりが見えるものにしたい」「幼稚園教育要領等を踏まえ、更に実践に役立つ具体的なものにしたい」という願いをもち、カリキュラムを策定した平成27年3月以降、3年間の実践を踏まえ、3・4歳児の部分を加えると共に、子どもの育ちのプロセスが見えるものとして、「学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム -学びに向かう力を発揮する-」と改訂することにしました。

今回改訂されたカリキュラムが、これまで同様、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校の先生方に活用されることを切に願うものであります。

（※）ここでいう「カリキュラム」とは、「子どもが自ら遊び学ぶ経験」の総体を意味している。（「学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム -学びに向かう力をはぐくむ-」平成27年3月策定参照）

## 1 幼稚園教育要領等の改訂（改定）のポイント

今回の幼稚園教育要領等の改訂（改定）では、生きる力の基礎を培うため、幼児期において育みたい資質・能力として、「知識及び技能の基礎」・「思考力・判断力・表現力等の基礎」・「学びに向かう力・人間性等」の3つを、5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）を踏まえ、遊びを通しての総合的な指導により一体的に育むことを目指しています。

この3つの資質・能力は、小学校、中学校、高等学校を通して伸びていくものであるという縦のつながりが表され、また、幼稚園・保育所・認定こども園すべての教育要領等の3歳以上の教育に関する記載がおおむね共通化されたことにより、横のつながりも表されています。

幼児期における「知識及び技能の基礎」は、「豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする」ことで、小学校の学びを先取りすることではなく、遊びや生活の中で気付いたり、できるようになったり、言葉で表現できるようになったりすることです。

「思考力・判断力・表現力等の基礎」は、「気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする」とされています。遊びや生活の中で気付いたりできるようになったりするプロセス、つまり、試行錯誤したり話し合ったりする中で培われる力です。

「学びに向かう力・人間性等」とは、「心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする」ことで、「知識及び技能の基礎」や「思考力・判断力・表現力等の基礎」を育む最も土台となる資質・能力です。

幼児期においては、資質・能力の3つの柱は、子どもの自発的な活動である遊びや生活の中で、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、できるようになったことなどを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育まれていきます。小学校以降になると、資質・能力は、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」として発展していきます。

幼稚園・保育所・認定こども園でそれらの基礎が培われ、小学校以上では、教科等の指導により成長していきます。身近な環境に関わる活動の充実から、子どもは、いろいろなことに気付き、考えたり工夫したりし、さらにやってみてみたいことが生まれ、それを追究し、やり遂げようとします。気付きは互いに結び付き、少しずつ様々な対象についての関わり方の知識となっていきます。工夫することは、どうしたらよいか迷う場面や、なぜそうなるか不思議に感じる場面で広く深く考える力となって発展していきます。興味や意志の力は、身の回りのたくさんの事柄や活動へと生かされていきます。それが資質・能力の3つの柱の成長なのです。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、0歳からの長い育ちを通して、5歳児後半に特に伸びていく5領域の内容を10の視点で整理したものです。資質・能力は、5領域のねらいに反映され、内容に示された活動の中で育ち、幼稚園・保育所・認定こども園から更に小学校へ、更にはその先に育まれていきます。その子どもの成長していく様子が、この10の姿を通して示されています。

また、幼児教育の在り方は、幼児期にふさわしいものであり、小学校教育の在り方は児童期にふさわしいものではありますが、そのつなぎ目はどのようにするとよいかということになります。子どもたちは、幼児期に学んだ力、つまり資質・能力をもって小学校に行くため、それを小学校の始まりに生かし、それを伸ばす形で少しずつ教科教育へ移行すると考えた際、資質・能力では抽象的で見えにくいと考えられます。それをいくつかの子どもの活動での様子に整理して表しておく、小学校にとっては、幼児教育の成果が見えやすいものとなります。子どもが育っていく姿をいくつかにまとめ、その姿に向けて幼稚園・保育所・認定こども園は育てていき、小学校はそれがある程度育っていることを確認し、その先へと育成していくことをめざして示されたのが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」です。

ただし、幼児教育にとっては、この中身は新しいものではなく、これまでのように5領域のねらいおよび内容の中で活動が行われていれば、10の姿は何らかの形で現れると考えられます。

## 2 幼児教育から小学校教育への接続カリキュラム改訂のポイント

一般的に、カリキュラムは、教科の系統性に即して順序立てて内容を並べたものと考えられています。幼児教育においては、この捉え方では表せないと考え、従来は、「子どもが自ら遊び学ぶ経験」の総体を「カリキュラム」と位置付けていました。

今回、幼稚園教育要領等に資質・能力の育成が示されたことを受け、これまでの【全体カリキュラム】【内容カリキュラム】を、資質・能力の育ちも踏まえた、より実践につながるものできないかと考えました。

今回の幼稚園教育要領等の改訂（改定）では、「幼児期において育みたい資質・能力」を踏まえつつ、子どもが幼児期の終わりまでに多少とも実現していくことが望まれる様子を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として整理しています。この姿が整理されたことで、幼稚園・保育所・認定こども園は、この姿に向けて育てていくという長期のめあてが生まれ、小学校は、この姿がある程度育っていることを確認し、その先へと育成していくものとして捉えることが可能となりました。

しかし、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5歳児になって突然現れるものではなく、それまでのつながりの中で育まれていくことを踏まえたとき、この姿が育まれてきたプロセスがある程度見えることが必要ではないかと考えました。そこで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を0歳からのつながり、そして、幼児期以降にどうつながっていくのかを見通す手がかりにしてほしいと考え、【10の姿が育つプロセス】を示しました。

また、「幼児の自発的な活動としての遊びは、…（中略）…重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。」（幼稚園教育要領総則）とあるように、幼児教育の中心は遊びです。

しかし、「こういう姿を目指して子どもを育てる」ということは理解できても、実際の遊びの中で、どのように子どもが育っていくのか、例えば、3歳も4歳も5歳も同様の環境で砂遊びをしていればよいのかななどの疑問が残ります。そこで、同じ遊びの場面を取り上げつつ、子どもの

育ちが記されているものがあれば、日々の保育の中でのヒントになるのではないかと考えました。

福井県では、従来のカリキュラム策定以降、カリキュラムの考え方をベースにした研修を進めてきました。幼稚園・保育所・認定こども園では、学びに向かう力を育むための様々な実践がなされ、研修では、事例の語り合いも進めてきました。これらの実践を踏まえ、子どもの主体的な興味や関心に基づいた遊びの中での育ちが見えるものとして、【遊びのプロセス】を示しました。

さらに、【遊びのプロセス】を【10の姿が育つプロセス】に照らし合わせてみることで、遊びの中で育まれる資質・能力が、どういう力につながっていくのかを確認できるのではないかと、また、この2つのプロセスを重ねて考えることで、各幼稚園・保育所・認定こども園の現状に合った独自のカリキュラムができるのではないかと考えました。そこで【遊びのプロセス】と【10の姿が育つプロセス】を合わせて【カリキュラム】として位置付けました。

各園では、学期のはじめに【遊びのプロセス】をもとに、遊びの展開をイメージし、いくつかの遊びをつないで、年間を見通した園独自のカリキュラムをつくってみます。その中の遊びでどのような姿が育つのか【10の姿が育つプロセス】を参照に考えてみましょう。ここでは、カリキュラム通りに遊びの活動が展開することが重要なではありません。保育者が、遊びの展開のイメージを広げることと、その中で育まれる10の姿を意識することが大切です。そして、全ての活動が終了した学期末等には、実際に展開した遊びのつながりを振り返り、あしあとをたどったカリキュラムとしてもう一度かき直しをします。このあしあとをたどったカリキュラムをもとに、どのようなプロセスで10の姿が育まれてきたか、保育者同士で語り合ってみましょう。

【10の姿が育つプロセス】と【遊びのプロセス】を示すことで、「今の年齢では、この姿になっていなければならない」「この遊びで、こうしなければならない」と誤って捉えられるかもしれません。形となって現れる姿（知識や技能）は、訓練や繰り返しによって身に付けることができるかもしれませんが、資質・能力の基礎である10の姿は、教えられて身に付くものではありません。遊びのプロセスの中で、子どもが試行錯誤しながら語り合い、またチャレンジする経過から育まれるものであり、その経過の中で、悩んだり、考えたり、決断したり、協力し合ったり、表現し合ったりすることが、10の姿につながっていくのです。従って、一人の子どもを遊びのある一場面から切り出して、10の姿の有無を語り合ってもあまり意味がありません。子どもと遊びの場面と友達（あるいは保育者）とが、どのような絡み合いの中で10の姿に結びついていくのか、これを読み取る力が保育者に求められているのです。

これらを踏まえて、幼児教育に携わる先生方と小学校教育に携わる先生方がこのカリキュラムをどのように見て、どのように使っていただくかについて第2章にポイントをあげます。

また、幼稚園・保育所・認定こども園は、いずれも幼児教育を行う施設として位置付けられていることを踏まえ、今後、「幼児教育から小学校教育への接続」と表します。

## 1 幼児教育の先生方へ

### 【10の姿が育つプロセス】について

子どもの「育ちのつながり」が具体的に見えることで、支援の在り方が分かり、その子に応じた支援があれば、よりよい育ちにつながります。それは、決してその年齢までに到達しなければならないものではなく、そういう「育ちのつながり」が考えられるという一案であり、子どもを支援する際に参考にさせていただきたいものです。知識や技能であれば、到達したかどうかを測ることができます。しかし、10の姿で示す資質・能力は、遊び等の活動のプロセスで育まれるものであり、測ることはできません。そのため、「育ちのつながり」を捉えることができると、10の姿を育む手立てがきっと見つかることと思います。

これをもとに、幼稚園・保育所・認定こども園（以下、「園」という。）で「この期間にこんな育ちのつながりが考えられる」「時期的にこれはもう少し後かな」「健康な心と体ではまともすぎているから、体を動かす面と保健の面とに分けて考えよう」という具合に、園の実情に合わせて変更し、使っていただきたいと思います。また、園の遊び・行事を見直す際に、「この遊び（行事）では、こういう姿が育っている」「この行事の後だから、こんな遊びにつながる」と、このプロセスを活用していただけるのではないかと期待しています。

### 【遊びのプロセス】について

例えば、「砂遊び」は年齢を問わず楽しめる遊びの一つです。3歳児がカップに砂を入れ、ごちそうをつくっている姿と、5歳児が全く同様にカップに砂を入れてごちそうをつくっている姿を見たら、どのように感じるでしょうか。どちらも、砂の感触を楽しみ、用具を使い、ごちそうに見立てて遊んでいます。3歳児にとって、この体験は貴重であり、この体験を通して砂の性質に気付いたり、自分なりに工夫して遊ぶことのおもしろさを感じたりするようになっていくと考えられます。しかし、3歳、4歳と園で過ごしてきた5歳児の姿として考えたとき、もちろん、個々の成長等、考慮しなければならないことはありますが、もしかすると、熱中する遊びが見つからずに、時間をもてあまして砂を触っているということはないでしょうか。

言うまでもなく、5歳児に「砂遊び」の意味がないわけではありません。スコップを巧みに使い、協力し合って大きなトンネルを何本もつくる様子を目の当たりにすると、5歳児の成長を実感できます。同じ「砂」であっても、そこで育まれる10の姿が異なるのです。「一つのもの＝特定の資質・能力」と、決めてかからないことです。ものには様々な発展の可能性があります。だから、遊びが楽しいのでしょう。そんな視点をもつことで、その子にとっての環境や支援を問い直すきっかけにならないでしょうか。

子どもたちからすると、当然のことながら10の姿を伸ばすために遊びを行っているわけではありません。楽しいから遊んでいるのです。散歩で見つけたダンゴムシから穴掘りが始まり、穴

を掘る工夫のおもしろさが砂遊びに転化し、砂が崩れないようにまいた水から水遊びに発展する、そのような遊びのつながりは、しばしば見られます。ものに含まれる特有の特徴が、子どもの特定の工夫する力や、特定の方向にイメージを広げる楽しさや、あるいは、力を合わせるこのおもしろさを引き出してくれるからです。保育者は、子どもの遊びに寄り添う経験を積み重ねると、「この遊びの後は、この素材（用具等）を用いた遊びに転換する」という見通しがもてるようになってきます。ものが引き出すおもしろさが次のものを呼び寄せるからです。ここではこのような「遊びのつながり」を【遊びのプロセス】として例示しました。遊びには様々な種類があるため、いくつかに絞ることは非常に困難でもあります。ここで示した遊びは、その一例でしかありません。しかし、どの園でもすでに取り組んでいる遊び、どの園でもすぐに取り組みそうな遊び、そして、子どもの学びを促す遊びとしてぜひ取り入れていただきたい遊びを挙げ、【遊びのプロセス】として作成したわけです。

園には園の文化があり、それぞれの園で、文化として根付いている遊びがあります。子どもの姿を見て、【遊びのプロセス】を参考に、自分の園では、どういう遊びでどのように子どもが育っているのかを考え、それを園独自のカリキュラムの中に生かしていただきたいと考えています。【遊びのプロセス】は、年間を通したカリキュラムを作成するときや、子どもの主体性が生かされるような園独自のカリキュラムを作成するときに参考になればと考えています。

遊びのいくつかを例として、遊びの中で子どもが学び育っていくために考えられる支援の一案も示しました。保育者が「こんな子どもに育てたい」という大きな願いをもち、今日の前にいる子の実態を捉え、「この子にはこんな環境が必要」「このような支援をすると、子どもの考えようとする心が揺さぶられるかも」と、明日の保育につながる支援を考える際の参考になればと思っています。

これらを活用し、各園にあったカリキュラム、その年の子どもたちにあったカリキュラムを考えていただけたらと考えています。

## 2 小学校教育の先生方へ

### 【10の姿が育つプロセス】について

2020年4月から完全実施となる小学校学習指導要領の総則第2の4の(1)には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。」と記されています。また、各教科においても、「低学年においては、(中略)…幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。」とあります。

つまり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえるのですから、それが何なのか、それが育まれるプロセスはどのようなものかを理解していただく必要があります。子どもは、0

歳からのつながりの中で今があること、その育ちはその子なりのものであり、その子の育ちを踏まえた支援が必要であることを今一度思い返していただき、「今あるこの姿は、どのような育ちをたどって培われてきたのか」「ここが難しいと思っていただけ、どの段階と捉え、支援していけばよいのか」という具合に、子どもを理解し、子どもに寄り添う際の一助にさせていただきたいと考えています。

ある研修に参加された保育者の方々に、質問に返っていただきました。10の姿を示す文章の「子ども」「幼児」等の言葉を全て「私」に置き換え、自身にそのような力が育っているか尋ねてみました。驚くことに、参加者のほとんどは、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿が育っていないと返答しました。

この出来事は、2つの教訓を示しています。1つ目は、10の姿で示された概念は、読み手に都合のよい事例を思い起こさせてしまう可能性があるということです。保育者が10の姿で示したいと思った内容と、小学校の教師がその言葉からイメージした内容が異なっているにも関わらず、互いに育っていると同意したり、まだ育っていないと反論したりすることに陥りやすいわけです。こういった行き違いを避けるためには、【10の姿が育つプロセス】の中で、具体的に現実的で個別的な例を挙げて、伝え合うことが重要となってきます。

2つ目は、10の姿が5歳児になって突然現れるのではなく、誕生から5歳までの成長のプロセスで順を踏んで育ってきたように、5歳以降も順を踏んでより高度な10の姿に育つことができるとことです。研修に参加した保育者は、質問された内容について、保育者にふさわしい10の姿として捉えて考えたために、まだ不十分だと応えたのでしょう。大切なことは、10の姿にはプロセスがあるということであり、【10の姿が育つプロセス】を示したのはまさにこのためなのです。保育者と教師が伝え合いたいのは、10の姿が、今どのような段階で、そして小学校に入学した後は、どのような姿が具現化すればよいのかを話し合うことなのです。

10の姿は到達点ではありません。小学校に入学した後も発展していきます。例を挙げてみましょう。5歳児の段階で協同する楽しさは、同じ目的に向かってみんなで力を合わせることのおもしろさです。ところが、小学校中学年頃になると、この楽しさの質が変化していきます。目的を共有して活動しようと思っても、個々人の得手不得手が互いに見えて、子ども個人の尊厳等の思いが絡み合い、ただ友達と協同することを楽しむことでは満足しない子どもたちも出てきます。つまり、協同から、互いのよさを認め合いつくり上げる協働を求め始めるのです。協同が協働に繰り上がっていくためには、社会的価値への気付き、自己についての深い洞察といった過程を踏まなければなりません。このプロセスを支援できることが、今、小学校教諭に求められている力量です。

### 【遊びのプロセス】について

遊びを中心とした活動は、幼児期にふさわしい教育方法であり、教科を中心とした小学校教育は、児童期にふさわしい教育方法です。しかし、「遊び」を中心とした教育と「教科」を中心とした教育の接続期は、どうしたらよいのか、幼児教育と小学校教育のお互いの教育が目に見えるようにと作成したのが、前回の「学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム -学びに向かう力をはぐくむ-」でした。

小学校学習指導要領解説総則編には、「小学校入学当初においては、幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、スタートカリキュラムを…編成し、その中で、生活科を中心に、合科的・関連的な指導…の工夫や指導計画の作成を行うこと。」と記されています。

それを踏まえて、幼児教育で行われてきた遊びが、どのように生活科と結び付くのか、またそれがどのように各教科に結び付くのかを見ていただくために活用していただければと思います。遊びを通して育まれてきたものを踏まえて小学校教育につなげていただくことで、子どもがより力を発揮できるものになると考えます。

【遊びのプロセス】が示そうとしていることは、「ものが引き出すおもしろさが次のものを呼び寄せる」こと、つまり、「もののつながり」であり「育ちのつながり」です。このつながりは、生活科や「総合的な学習の時間」の展開のプロセスと全く同じ構造をもっています。もののもつ魅力が子どもの発意をうみ、もっとおもしろくしたいとイメージを広げ(構想)、段取りを決めて(構築)、実行してみる(遂行)。そして、もっとおもしろくしたいと振り返って(省察)、また試行錯誤しながらチャレンジしようとする。このような展開の中で、子どもの思考力・判断力・表現力や、協働する力・向上心・対話力・社会参画力などの資質・能力が培われるのです。【遊びのプロセス】は遊びというものを取り上げながら、生活科や「総合的な学習の時間」のつながりの土台となるつながり方を示しています。

## 3 接続をコーディネートする先生方へ

### 【専門職の力量形成】について

「第1章カリキュラムの考え方」では、【遊びのプロセス】と【10の姿が育つプロセス】の活用の仕方として、年間を見通した園独自のカリキュラムとあしあとをたどったカリキュラムの話をしました。まず各園では、学期のはじめに【遊びのプロセス】のもと、遊びの展開をイメージして、いくつかの遊びをつないで年間を見通した園独自のカリキュラムを作ってみること。そのカリキュラムの中でどのような姿が育つのかを【10の姿が育つプロセス】を参照に話し合ってみること。さらに、全ての活動が終了した学期末等には、実際に展開した遊びのつながりを、あしあとをたどったカリキュラムとしてもう一度かき直してみる。そして、このあしあとをたどったカリキュラムをもとに、どのようなプロセスで10の姿が育まれてきたか、先生方で語り合ってみることの大切さを強調しました。

こういった年間を見通した園独自のカリキュラムとあしあとをたどったカリキュラムのサイクルは、専門職の力量形成には欠かせない活動です。あしあとをたどったカリキュラムの作成で省察した「培った資質・能力」の捉え直しは、必ずや翌年の年間を見通した園独自のカリキュラムの作成に反映され、遊びの環境構成等に役立つからです。このサイクルは幼児教育・小学校教育の専門性の違いを超えて必要なことです。

#### 【接続推進計画】について

前回の「学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム -学びに向かう力をはぐくむ-」では、連携推進カリキュラムの作成をお願いしてきました。今回、そこは継続しつつ、これまで行われてきた交流活動を、「招待する」「招待される」関係から「共に楽しみ、共に学ぶ」関係へと進めたいと考えています。準備・練習に多くの時間を割くのではなく、子ども同士が、一緒にどんな活動を進めていくか相談したり、一緒に活動したりすることに重きをおいていただきたいと願っています。そのため、交流活動の前後に先生方同士の話し合いの場（特に活動後に、子どもの姿を通して「やってみてどうだったか」を話し合えるような場）をもっていただくことを意識した【接続推進計画】の作成をお願いします。

## 4 すべての先生方へ

#### 参考資料について

福井県では、「学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム -学びに向かう力をはぐくむ-」の実践化を目指し、平成27年度から「市町幼児教育アドバイザー・園内リーダー養成研修」をスタートさせ、同時に、県内全域で小学校を中心として連携・接続を推進してきました。

その中で、現場の先生からいただいたたくさんの事例を活用し、実践から得られた例をもとに、実践イメージや実践ポイントの共有を図りたいと願っています。

## 1 【10の姿が育つプロセス】の考え方

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を一言で表すと、「『幼児期に育みたい資質・能力を子どもの具体的な姿』で表したもの」と言えます。

では、小学校に入学してくるすべての子どもたちが、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を実現していると言えるのでしょうか。そうではありません。これは、「育ってほしい姿」であって、「到達目標ではない」のです。

それぞれに異なる子どもの育ちを10の視点から見取り、小学校での学びに生かしていくことが求められます。幼児教育に携わる先生方と小学校教育に携わる先生方が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」という共通の視点に基づき、具体的な姿で子どもたちを語り、子どもの学びをつないでいくことが大切です。

一方で、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、「主に5歳児後半にみられる姿」とされていますが、その時期になって、突然、現れるものではありません。この時期までに育みたい「資質・能力」は、この世に生まれた瞬間から育まれています。そして、大人になるまで、さらに、大人になっても自ら磨き続けていくことになる「資質・能力」です。

そこで、人がよりよく生きるために一生をかけて育んでいく「資質・能力」を「10の姿」から捉え、その育まれるプロセスを表したのが、この【10の姿が育つプロセス】です。このプロセスは、2つの専門的な視点から御意見をいただきながら作成しました。1つは、現段階で明らかにされている子どもの心身の発達や学びのプロセスなどに関する研究をもとにした科学的な知見です。もう1つは、専門職である園の先生方、小学校の先生方からの御意見です。日々、子どもたちの学びに寄り添いながらつかんでいる「育ちの実感」を盛り込んでいます。

目の前にいる子どもたちの姿から、どのような「資質・能力」が育ちつつあるのか、また、育っている「資質・能力」は、どのようなプロセスで培ってきたのか、といった点から、この【10の姿が育つプロセス】を使っていただき、学びをデザインする一助にいただけたらと思います。

なお、ここでは、0歳から7歳までの子どもの姿を表していますが、そのスタートである0歳の時期の姿は、乳児保育の3つの視点である「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」と重なります。そして、7歳以降では、各教科等で育てたい資質・能力につながっていくことも理解していただけるのではないかと思います。

## 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである。（平成29年告示 幼稚園教育要領より）

<b>健康な心と体</b>	幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
<b>自立心</b>	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
<b>協同性</b>	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
<b>道徳性・規範意識の芽生え</b>	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
<b>社会生活との関わり</b>	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
<b>思考力の芽生え</b>	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
<b>自然との関わり・生命尊重</b>	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
<b>数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚</b>	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
<b>言葉による伝え合い</b>	先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
<b>豊かな感性と表現</b>	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	10の姿	6歳	7歳以降	
伸びやかに伸び伸びと育つ	<b>心地よさを感じる</b> ■体の清潔、気持ちよい環境での心地よさを感じる ■伸び伸びと、はう、立つ、歩く等、思い通りに体を動かす楽しさを感じる		<b>基本的な動きを身に付ける</b> ■座る、立つ等の姿勢を維持し、バランスをとる動き ■走る、跳ぶ等の移動する動き		<b>動きを調整する</b> ■やりたいことに向かって、動きを調整する ■持つ、投げる等の用具を操作する動き		<b>健康に気付く</b> ■運動と健康の関わりについて気付く		<b>健康について自覚する</b> ■けがの防止、病気の予防について自覚し行動する ■心と体の密接な関係に気付く	
	<b>依存と愛着</b> ■特定の人へ依存する ■特定の人への愛着を感じる		<b>人間関係</b> <b>安心感を感じる</b> ■特定の人に見守られていると安心感を得られ、自分のやりたいことをやってみようとする		<b>自ら行動し、主張する</b> ■やりたいことに向かって自ら行動する ■自分のやりたいことを主張する ■自分でできることは自分でし、自信をもつ		<b>自己調整をする</b> ■自分のやりたいことが他者とぶつかった時、自分の気持ちを何とか調整する ■自己の意見を言い、友達の見解を聞きながら、気持ちの自己調整をする		<b>得手不得手を自覚する</b> ■得意なこと不得意なことを自覚する	
身近な人と気持ちが通じ合う	<b>感情を共有する</b> ■特定の人からの愛情を感じ、自分も愛着を感じる ■まわりの人へ興味をもつ ■ものを介しての人とのやり取りを楽しむ		<b>行動を共有する</b> ■友達のまねをする ■友達と一緒にすることを楽しむ		<b>目的を共有する</b> ■友達と関わりながら目的を見出す ■共通の目的が実現する喜びを味わう ■共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりする		<b>協同することを楽しむ</b> ■互いの役割を意識したり、ルールを共有したりしてうまくいくように考える		<b>中学年：仲間意識を共有して協働する</b> <b>高学年：社会的課題に対して協働する</b>	
	<b>気持ちを体験する</b> ■自分の行為に対する様々な気持ちを体験する		<b>善悪を知る</b> ■褒められたり叱られたりして、してよいことと悪いことを知る		<b>きまりの必要性を感じる</b> ■きまりがあることを知る ■きまりがあることで、遊びやすくなったり、生活しやすくなったりすることを感じる		<b>相手の立場に立つ</b> ■友達の気持ちを考えながらきまりをつくったり、工夫したりする ■友達の気持ちを知り、自分の気持ちに折り合いをつける		<b>善悪の判断に基づき行動する</b> ■人からよい行いだと認められる行動をする ■人からよい行いだと認められる行動をして損をする場面も乗り越える	
身近なものとの関わり感性が育つ	<b>家族との関わりを楽しむ</b> ■家族に興味をもつようになり家族が好きになる ■家族と関わりようになり家族と関わることを楽しさを感じる ■家族に大切にされていると感じ、家族を大切にしようとする		<b>友達や先生、知っている人と一緒にすることを楽しむ</b> ■友達と一緒に活動することを楽しむ ■地域の行事などに参加し、地域のひととの関わりを楽しみながら、地域のよさや文化、生活の豊かさに気付く		<b>地域のひとのかかわりを楽しむ</b> ■知りたいと思ったことを人に聞いたり、本等で調べたりする ■公共施設を訪れ、施設の様子や働いている人に関心をもつ		<b>調べたことを伝え合う</b> ■自分が調べたことを遊びや生活の中で伝え合う		<b>調べたことを活用し、判断する</b> ■目的のために調べたことを活用し、その情報に基づき判断する ■公共物や公共施設は、皆のものであり、自分の生活に関係がある場だと分かり、大切に利用する	
	<b>知りたいと思う</b> ■まわりの人やものに興味をもつ		<b>環境</b> ■興味をもったことについて詳しく知りたいと思う		<b>直感的に考える</b> ■自分の視点に立って考える ■見たままをそのまま捉えて考える		<b>具体的な操作を伴って考える</b> ■見かけに左右されず、目の前の具体的な操作によって物事を論理的に考えていく		<b>論理的・分析的に考える</b>	
身近なものとの関わり感性が育つ	<b>五感で感じる</b> ■人やものの存在を五感で受け止め体を動かして確かめる		<b>試しながら考える</b> ■目的と手段のつながりをイメージし、試しながら考える		<b>触れる</b> ■生き物の形や大きさ、動きに興味をもち、触って確かめる ■生き物の誕生に関心を示す		<b>かかわる</b> ■生き物を飼ったり、野菜を育てたりして、生き物には命があることを知る ■草花や木の実などを見つけて、遊びに取り入れる ■身近な自然現象に関心をもち、それらを取り入れて遊ぶ		<b>働きかける</b> ■不思議に感じたことについて、見直しをもって調べる	
	<b>感じる</b> ■生き物に気付く ■生き物に興味をもつ ■散歩を楽しむ		<b>感じる</b> ■ものの存在を五感で受け止め、イメージをもつ		<b>見分ける</b> ■ものの大きさを見分ける ■ものの形を見分ける		<b>対応する</b> ■1つのものとの対応させる		<b>働かせる</b> ■命の尊さに気付く、いたわったり大切にしたりする	
身近なものとの関わり感性が育つ	<b>言葉の響きを楽しむ</b> ■歌やわらべうた、絵本、手遊び等に親しみ言葉の響きやリズムを楽しむ ■音や言葉のまねをする		<b>生活の中の言葉が分かる</b> ■家族や親しい人の言葉が分かる ■「ワンワン」が犬のことだと分かる ■家族や親しい人の名前をよぶ ■一語文、二語文、三語文、多語文とだんだんつながって話す		<b>生活の中の言葉を使う</b> ■簡単な事実や因果関係のある文を話す ■未来、過去、仮定、条件、受け身の入った文を使う ■標識のことも意味が分かる ■助詞やものの単位等を使いながら話す		<b>言葉と文字がつながる</b> ■文字に興味をもつ ■文字を遊びに使うなどして楽しむ ■読める文字を探して単語などを読む		<b>簡単な文を読んだり、書いたりする</b> ■言葉のまとまりや響きなどに気をつけて簡単な文を読む ■文字を書き、文や文章の中で使う	
	<b>思いを表す</b> ■泣く・笑う・声を出す ■喃語や体の動きで思いを表す		<b>思いを伝える</b> ■言葉と感情をつなげる ■思いを言葉で伝える ■家族や親しい人との会話を楽しむ		<b>相手の思いを受けとめる</b> ■相手の話を聞く ■相手に分かりやすく話すことの大切さに気付く		<b>経験や考えを伝える</b> ■経験したことや想像したことを話したり、考えを説明したりする		<b>思いや考えを伝え合う</b> ■互いの話に関心をもち、相手の思いや考えを受けて、つないで話す ■話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞く ■相手に伝わるように、話す事柄の順序を考えて話す	
身近なものとの関わり感性が育つ	<b>快・不快を表現する</b> ■表情やしぐさ、発声等により、感情を表す		<b>やさしさを感じる</b> ■特定の人へのやさしさや愛情を感じる		<b>美しさや力強さを感じる</b> ■自然やさまざまな環境、人、ものなどの美しさや力強さを感じる		<b>感じたことを言葉で表現する</b> ■やさしさに感謝の気持ちを表現したり、美しさや力強さを言葉で表現したりする		<b>鑑賞を楽しみ生活を豊かにする</b>	
	<b>歌やリズムを楽しむ</b> ■動作や音などの繰り返しや強弱を楽しむ ■自然の音を感じる		<b>音や絵などで表現することを楽しむ</b> ■音を出したり、絵をかいたりすることを楽しむ		<b>ものづくりを楽しむ</b> ■さまざまな素材を使ったものづくりを楽しむ		<b>合唱や演奏を楽しむ</b> ■みんなで歌ったり、楽器を演奏したりすることを楽しむ			